

来る春をしばし遠ざけ…

ほめほめ
しめしめ
うふふみ
通信



東江一紀

このところ毎年、寒さがゆるみ始めると、おい、おい、もう春かよ、ちよつと待つてくれよ、と言いたい気分にはせられる。

いや、もちろん、咲き乱れる万葉の桜を、ベイスターズ連続優勝に向けてのペナント・レース開幕を、四歳優駿が覇を競う皐月賞や桜花賞を、ひと並みに心待ちにする気持ちは

あるんです。

でも、だからこそ、そう簡単に春になってくれるなよ、と思ってしまう。手順つてもあるだろう、と思ってしまう。

こちらら、ようやく皮膚が寒さになじんで、冬用の体になってきたところだ。まだまだ、冬を味わい尽くしていない。

いえ、冬といっても、スキーだとか、スケートだとか、雪見酒だとか、寒中水泳だとか、フルヤ・ウィンターキャラメルだとか、そういう具体的な、楽しげな冬じゃなくてですね。なんかこう、秋のわびしさに一本芯が通ったというか、朝水道の水で顔を洗うときに気合が必要というか、太郎の屋根に雪ふりつむというか、あめゆじゆとてちてけんじやというか、書いてるうちに自分でわからなくなってきたけど、要するに、肉体と精神のモードとしての冬であります。

その冬をきちんと消化できないうちに春になられちゃっても、困るのだ。このモードで、もう少し冬を過ごしたいのだ。べつに、冬が好きならわけじゃないし、変化を疎むというのとも、ちよつと違う。

まあ、単に、季節の巡回スピードについていけなくなっただけのことかもしれない。なんちゆうか、行く春を惜しむその前段階として、来る春をしばし遠ざけたいという気がするのだ。遠ざけたって、どうせ来ちゃうんだからさ。

春にかぎらず、来るとわかってるものは、特にうれしいことや楽しいことは、できるだけゆっくりと来てほしい、というのが、ここ数年のわたしの気持ちのありようですね。

それに、冬のぶんの仕事はまだかたづいて

ない、という事情もあるなあ。それを言ってしまうと、秋のぶんだつて、夏のぶんだつて、去年の冬のぶんだつてあるし、三年前の締切でまだ取りかかってない本だつてある。いや、いや、一九九〇年に引き受けた百九十ページの短編集が、あと八十ページほど残ってるぞ（忘れたわけじゃなくて、遅れてるだけですから、ご安心ください、★★書房さん）。

結論づけてしまうと身もふたもないけど、周りの景色を見ながら、のんびり歩きたいってことですかね。

この連載を始めた四年前は、自主懲役状態で、ほんと、罪を償うみたいに、青筋立てて働いていた。

今も、自宅軟禁状態で、忙しさそのものはそれほど変わらない。起きてから寝るまで、ずっと仕事をしていて、休みもほとんど取れずにいるのだが、青筋は立たなくなった。

さつさと仕事をかたづけ、早く楽になりたいという前向きな気持ちが失せ、だからといって、楽になつてもしかたないという後ろ向きの気持ちにも傾かず、とりあえず小出しに楽をしていこうという横向きの気持ちで、日々を送っておるのです。

こういうの、初期老人力とでも呼べばいいんだろうか。今までは、ぬくぬくするためにせかせかしようというアリスさんの勤勉さで

働いて、結果的には、せかせかの拡大再生産を招いてきた。せかせかの肥大が、ぬくぬくをどんどん先送りしていった。

まあ、そのおかげで、このきびしいご時勢になんとか暮らしていけるわけだが、いつまでもそれじゃ、もちませんわね。

この連載を引き受けたのも、どうせ忙しいんだから、毛色の違う忙しさをかかえ込むのも一興じゃ、というやけくそぎみの「若氣」からで、今思うと、無謀な拡張策だった、と言わざるをえない。書き始めてみてつくづく、翻訳家は物書きではないことがわかった。

いえ、ちゃんと両方こなしちゃう人もいるんですが、わたしにはどうも無理でした。

隔月というサイクルは、仕事の条件としては相当「ぬるい」はずなのに、毎度、毎度、ネタがない、筆が進まない、締切に間に合わない、できあがったものがつまらない。

経験としちやおもしろかつたし、得るものは自分なりにたくさんあったけど、苦しさともどかしさは増すばかりだった。

月刊誌に連載を持つてる人は、それだけでえらい、と思いますね。週刊誌となつたら、もう殿上人だ。

敬愛する殿上人のひとり、ナンシー関さんが、ある連載コラムで、女子アナウンサーのいわゆる「才色兼備」の仕組みを、「見る側が

積極的に『才』を汲み取り、『色』にゲタをはかせる」と喝破していて、思わず座布団を献上したくなりましたが、考えてみりゃ、笑いごとじゃない。

翻訳家の書く雑文も、もしかすると、似たようなゲタを履かされているのではなからうか。えっ、壮絶な勘違い？ ま、そうかもね。商品価値に差がありすぎる。

商品価値といえば、毎回、つたないわが文を「包装」で引き立て、繕ってくれていたのが、竹口義之さんのイラストである。こりゃもう、みごとなくらい、執筆者本人より数段ほのぼのとしたキャラクターが、できあがっちゃってます。なんだか、うれしい。面識がないのが、幸いしたんでしょね。深く深く御礼申し上げます。

彩り少なき人生ながら、この四年のあいだには、翻訳四人同盟の旗揚げがあり（いつのまにか、ヴァーチャル団体になってしまったけど）、パソコン導入があり（今はもう四台め）、引越し&職任合体があり（「ひとりひと組の布団」の悲願達成）、ベイスターズ優勝があった（うるうる）。

今後は、ひたすら本業に精を出しながら、実人生が少しでもこの連載タイトルに近づけるよう、のんびり歩いていく所存です（ああ、また締切に間に合わない！）。